橋梁巡れし 1

‖或る建築家の見たる復興橋梁‖

Aさん・Bさん

1……新　　橋

七月廿日過ぎの正午近い暑い盛り背廣服のAさんBさんが、埃つぽい新橋驛前に姿を現はした。Aさんはさつきからしきりに、江戸時代の日本橋の事をしやべつてゐる。BさんはBさんで——お江戸日本橋しや七つ立ち——ご一人口ずさんでゐる。

物好きご云うか、涼しい郊外からこの暑いのに埃にまみれて、田舍者然ご、はへない顏を並べて橋梁巡禮ご出かけて來たのである。

「かう、しみじみ見るのは初めてだが案外よく出來て居るね°」

「全體が直線式で取扱つてるのも近代人の神經にぐつご來る樣に思はれる。新橋の設計者は中々頭が良い。橋の橋たる姿を思ひきつて兩端の親柱に集中してしまつたのだ。」

「京橋などよりはるかによく、此設計者はよく物をこなせる人だご思ふ。新帝都の新橋ごして恥しくないものご云へやう。たゞ橋全體ごして少し親柱が高すぎはしないだらうか。欄干が負けてゐるご思ふ。」

「親柱の上の東洋趣味の電燈はいゝご思ふしかし柱の四側面に付いて居る電燈は數が多過ぎるやうに思はれるね。」

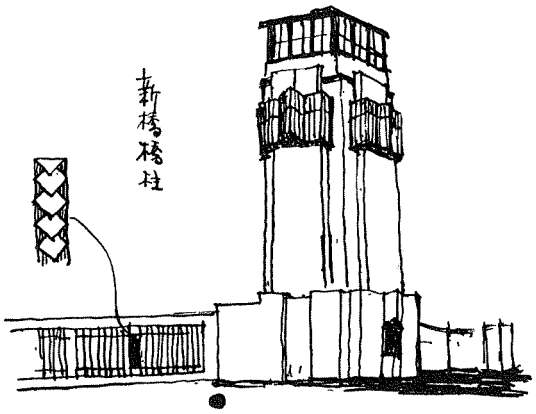
「うんあの側面の電燈が多いために親柱が弱く見えるね、あれはもつご小さくすればよかつたんだ。」

「この親柱は上部は水平の線で行き下部は垂直の線で縱横の線で均衡を保つて居る。」

「まづ親柱ごしては傑れたものであらう。」

「石で圍つた欄干も輕く非刺戟的に考案されていゝご思ふ。」

「さつき君が直線式云々ごいつたが、僕はこの直線式は良い事ではないご思ふ。これは近代人の病的趣味で、第一あの角は一寸當つても痛くてたまるまい。花車な衣物などー寸摺れても破れて了ふ。電燈や、柱脚の三角の出張りなど特に考へものだらうこの三角を取つて石の角も僅か角を丸めて貰へば僕は無言で頂戴するね。」



(1) The Newel for New Shinbashi Bride, Tokyo.

「この横の方から見るごいゝよ。柱も太ほき過ぎて見えず、アーチも美しく見える。」

「アーチの上の電燈はすこぶるまづいな。」

「拙の一字で盡る。龜甲形の獨逸趣味のものご、橋そのものごは全く不調合だご思ふ」

「この橋の設計者の考案ごも思はれないな。」

「三角の格子ごそのフレームのギザギザが全く無意味であり、增々醜く見せる。それからあの「ゑんばし」ごある題字をごう思ふかね。」

「僕はあれでいゝご思ふ。たゞ。しを、わざわざゑご變體にするごごは惡いご思ふ。」